

令和五年度
名寄市立大学
学校推薦型選抜・社会人選抜

小論文問題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、HBの黒鉛筆またはシャープペンシル（シャープペンシルの芯はケースから取り出したもの）、消しゴム、鉛筆キャップ、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ハンカチ、ティッシュペーパー（袋・箱から取り出したもの）以外、不要な物は置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は静かに手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの間に答えなさい。

これまでの日本社会でも、貧富の差は常にありました。江戸、明治、大正、昭和、平成と、常に金持ちは大きな家を構え、子の教育や娯楽に大いにお金をかけてきました。彼らは自分と同レベルの階級の中で人脈を築き、さらなる成功を手にかけていたのです。一方で、長屋暮らしの人々は一家でギョウギョウに暮らして、その日食べるものもままならない。そういった差はいつの時代も存在していました。

では今、いったい何が問題なのか。それは「貧富の格差」が長期化、固定化、鮮烈化していることです。自宅以外に豪華な投資用のマンションを何棟も保有し、さらに金融投資で富を積み増している層がいるかと思えば、もう一方では世代を超えて貧困が受け継がれていく——そのような社会の格差に誰もが驚かなくなっています。

かつては小学校卒の首相や企業の成功者がいた日本です。若者たちは立身出世を夢見て、懸命に働き、「住宅すべろく」ゲームにも参加できました。

しかし、現在はどうでしょう。貧困ループから抜け出すのは容易ではなくなりました。幼少期からの「教育格差」が、「所得格差」に続いているからです。

さらにここ三十年余りで、日本は「自己責任」論が声高に叫ばれる国になりました。ホームレスになったのはその人が努力しなかったから。非正規雇用者が簡単にクビになり、ボーナスももらえないのは、その人が正社員になろうと努力しなかったから。ひきこもりなのは、自分が努力しないから。パート暮らしで生活が苦しいシングルマザーは、その人生を自ら選択したから。「生活保護」者は、働くのが嫌で楽をしたいから。すべて自分の「選択」の結果なのだから、仕方がない。なぜ社会に文句を言うのか——。

しかしこれらは、はたして本当に「自分」が頑張ればどうにかできた問題ばかりなのでしょうか。

たとえば貧しい田舎から出てきた若者が、建設現場に住み込みで働き、兄弟が継いだ実家に戻ることもできず、マイホームも持てずに老いていく場合、そこに社会の構造的課題はなかったのでしょうか。非正規雇用では社会保障や貯蓄は難しく、病気や怪我をすれば職も住まいも同時に失います。気づいたら路上で生活していたような場合、本人の自覚や努力が足りないという一方的に責められるのでしょうか。

あるいは、たまたま大学卒業時に経済不況が重なった世代は、仕方なく派遣や契約社員として社会人生活をスタートします。しかし新卒一括採用が一般的な大手の日本企業が、既卒でかつ派遣しか経験してこなかった人を正社員として雇用することはほとんどありません。専門的な職業訓練を受ける機会も得られず、生涯にわたり不安定な雇用状態を余儀なくされる。そういった時代の不運も、本人の努力不足ゆえでしょうか。

画一的な日本の学校教育では、集団生活に馴染めない子や、いじめの構造が生じやすいともいわれます。心にトラウマを抱えて学校をドロップアウトした子が、不登校からひきこもりに移行する例は、もうずいぶん前から指摘されていたことです。これらを社会問題として認知しながら具体策を打ち出さなかった社会で、その責任はひたすら当事者とその家族だけが負うべきなのでしょう。 「保育園落ちた日本死ね!!!」の社会で、幼い子どもを抱えてシングルマザーとしてパート暮らしだった女性が、コロナで解雇されて一日一食で暮らしているのは、はたして本人の自覚が足りなかったからでしょうか。

どんな土地に生まれるか、どんな教育レベルの親の下もとに生まれるか、どんな時代に生まれるか、どんな周囲の人間環境の下で育つのか、そういったあらゆる環境が物心つかない頃から私たちの言動や人生の選択に影響を与えていきます。それらを「自己責任」の一言で片づけるのは、想像力の欠如以外の何ものでもない、私は考えます。

先日、ある人がテレビでこんなことを言っていました。

「大学で一所懸命勉強して資格をとり、今の仕事に就けたのは自分自身の努力の結果。ホームレスは努力しなかったから、働きたくないから路上にいる。結局、自分の努力が足りないからですよね」と。

驚きましたが、このような認識はこの男性ばかりではないでしょう。心の奥底でこう信じている人はかなり多いはず。しかし、こう想像力を働かせることもできないのでしょうか。

「では、自分が仮に路上生活者の下に生まれたとしたら、自分はそれでも立派な塾に通い、有名大学に進学して、勉学に専念することができたかどうか」と。

その方が大学に進学して成功している。その裏には、自分自身の努力以上に、その人の教育にお金をかけることに価値を見いだした親がいたからです。「勉強などしても無駄だ。それより高校を出たら働け」と強制せず、「あなたの努力は報われる。進みたい学校に進みなさい」と背中を押して見守ってくれる家庭に生まれたという幸運が、多くの場合根底を成しているのです。現在日本にはびこる「自己責任論」を、私たちはもう一度よく考え直す時期に来ているのではないのでしょうか。

『新型格差社会』 山田昌弘著 朝日新聞出版 二〇二二年より)

問一 傍線部「現在日本にはびこる『自己責任論』とそれに対する筆者の考えを二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 「貧富の格差」の固定化は人や社会にどのような影響を及ぼすか、あなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。